

新・下野市風土記

下野の高僧(1) 勝道上人



下野市教育委員会 文化財課

栃木県内には、古代仏教文化に関する史跡や仏像などの文化財、また、それらの文化を開花させた高僧に関する伝記や伝説などが多く残されています。今回は、そんな高僧の1人で、男体山登頂（開山）に挑んだ勝道上人を取り上げます。

勝道上人、男体山登頂までの道

勝道上人は、『二荒山碑』や『補陀洛山建立修行日記』によると、天平7(735)年4月21日に、下野国府の国司の次官に当たる下野介を務めていた若田高藤と豪族の吉田氏出身の母の間に生まれました。夫婦はなかなか子が授からず、現在の栃木市出流町の寺院で伊豆留千手観音に祈願したところ、勝道(童名は藤糸)を授かったと記されています。

勝道は、天平宝字6(762)年に下野薬師寺の如意僧都に師事し、僧になるための戒めである具足戒を受け、正式な僧として出家しました。その後、下野薬師寺を離れて山岳修行の道を選んだと考えられており、寺伝によれば、天平神護元(765)年には出流山満願寺を開創したとあります。

勝道上人は、さらなる山岳修験の場として、男体山登頂を志します。北方で蝦夷との対立が激化したことによって、中央政府の依頼を受け

ていたという説があります。

最初の登頂は神護景雲元(767)年に試みられましたが、失敗します。天応元(781)年に再度、試みますが、まともや失敗。

そして、延暦元(782)年、最初の挑戦から15年後、3度目で、ついに登頂に成功しました。

このとき勝道上人は、山の麓で17日間にわたって読経を行い、「三宝を山頂に捧げ、日光山の神霊を礼拝し、衆生の幸福を願いたい。善神・毒龍・山魅に登頂の手助けをしてもらいたい。自分は山頂にて菩提の境地に至りたい」という内容の誓願をしたと記されています。

また、登頂の途中、華厳の滝から流れる大谷川に道を阻まれた勝道上人一行が護摩を焚いて神仏の加護を求めたところ、深沙大王が現れ、2匹の蛇で橋を作って渡してくれたという神橋の伝説もあります。

山頂に至った勝道上人は、誓願のとおり37日間、日光山の神霊を礼拝しました。

登頂以後

勝道上人は延暦3(784)年に再び男体山に登り、弟子たちとともに中禅寺湖畔に神宮寺と中禅寺を建立しました。神宮寺で4年以上にわたって修行した後は山を降り、延暦14(795)年頃に、上野国講師として上野国分寺に居を移したようです。また、大同2(807)年の早魃の際に男体山に登攀し、祈雨(雨ごい)の法を行ったところ雨が降り、その功績を称えられて伝灯法師という位が授けられました。

弘仁5(814)年には、空海が知人に依頼され、日光開山の登山記を記しています。これは、『性霊集』巻第二に「沙門勝道山水を歴て玄珠をみかくの碑」として収録されています。

なお、勝道上人は弘仁8(817)年、83歳でその生涯を閉じたと記されています。

後世の調査

大正13(1924)年と昭和34(1959)年に行われた男体山山頂の発掘調査で、奈良時代から江戸時代にかけての遺物3,000点が出土しました。

主なものは、仏具類・銅鏡・銅印・古銭・武器・農工具・土器・陶器類で、金銅製の塔形合子は、正倉院御物に類似するものがあります。また、銅印は3点出土していますが、その中の1点には「東尼寺印」という文字がみられます。この「東」は都賀郡(古代では都加)を指し、都加郡にある尼寺とは下野国分尼寺のことと考えられます。

これらの遺物は、現在、重要文化財に指定され、日光二荒山神社宝物館に収蔵されています。

また、下野薬師寺跡には、藤麿墳と呼ばれる墳墓(市指定史跡)があり、勝道の父親のものとして伝えられています。